

36

鼎談書評

アラブの混迷は、スパイが活躍したこの時代に始まった

スコット・アンダーソン／山村宣子訳

ロレンスがいたアラビア(上)(下)



白水社
上・下各2800円+税

山内 ロレンスと聞けば、我々の世代はすぐにデヴィッド・リーン監督の名作『アラビアのロレンス』が頭に浮かびます。この本はロレンスと同時代に活躍した各国のスパイにも触れ、当時のアラブの様相を描きながらロレンスの歩みを追った一冊

です。先日、将来を嘱望されている若い政治家と話をしていたところ、たまたまロレンスの名が出て来ました。「最期はどうなったんですか」と聞かれましたが、若い世代には馴染みがなくなってきたのでしょうか。中村 えっ、私なんて、アラビア

といえばロレンスしか知りませんよ(笑)。主演のピーター・オトゥールのかっこよかったこと。この本に載っているロレンスの写真も素敵でした。実際には背が低かったのですね。他のスパイたちの暗躍などもまったく知らなかったもので、たいへんおもしろく読みました。

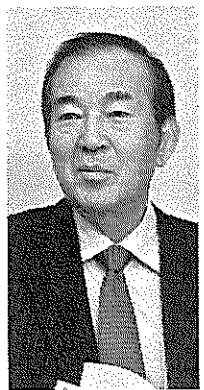
山内 第一次世界大戦が始まった一九一四年、オックスフォード大学を出た考古学者のロレンスは素人ながら職業軍人となり、イギリスのスパイとして調査研究の名目でオスマン帝国支配下のアラブ地域に乗り込みます。そこで「大アラビア構想」を持つ独立運動の指導者フサインの息子ファイサルに接触し、トルコ人に対する共闘を進めるのです。

山内 日本語タイトルももうまい。原題は「Lawrence in Arabia」。映画のタイトル「Lawrence of Arabia」から「ロ」だけを入れ替えたニュアンスを、「ロレンスがいた」アラビア」と上手に日本語にしている。

ギリスは、英独戦争が起きたときオスマン帝国がドイツ側についてイギリスの保護するエジプトを攻撃してくることを想定し、オスマン帝国の地理を把握しておきたかった。第二次世界大戦前夜には日本の考古学・民族学の学術調査隊もアジアを駆け巡りました。京大系が有名です。「大東亜共栄圏建設」のための情報収集ですよ。考古学には帝国主義の道具という側面がある。ロレンスに限らずこの時代のアラブに「学者スパイ」が入り乱れるのは当然でした。

チャーチルも認めた文才

「アラビアにいたロレンス」なんて訳していたら艶消しだ(笑)。学者の視点に立つと参考資料が英語文献に偏りやや物足りませんが、ジャーナリストの著書としてはひじょうにレベルが高い。ロレンスの著書で映画の原作でもある『知恵の七柱』とは異なる解釈もあり、興味深く読みました。たとえばロレンスがヨルダンからエルサレム、そしてダマスカスと迫っていく過程でシリアの都市ダラアに潜伏し、トルコの行政官に接触する場面。『知恵の七柱』で



やまうちまさゆき
山内昌之
(歴史学者・明治大学特任教授)



かたやもりひで
片山杜秀
(政治学者・慶應義塾大学教授)



なかむらけいこ
中村桂子
(生命誌研究者・JT生命誌研究館館長)

は、ロレンスは筆舌に尽くしがたい拷問を受けたうえに慰みものにされるものの強靱な肉体でそれを撥ね除けたことになっている。ところが著者はロレンスが拷問に屈して自らの意志として男色を受け入れ、それを境に人格が変わっていったと想像しています。なるほど、と思わざるを得ない。なにしろロレンスはチャーチルも認めたほどの文才の持ち主で、『知恵の七柱』に出てくる冒険譚は、ほぼフィクションと言っている(笑)。

中村 オートバイ事故で亡くなる一週間前に友人に書き送った、「葉っぱは木から落ちて枯れる前、こういう感じがするのだらうと思う」という詩的な言葉に本心を見せていますね。

山内 中東の混乱の一因は、ちょうど百年前の一九一六年に英仏が結んだアラブ分割の密約「サイクス＝ピコ協定」にあります。本書のサイ

クスに關する描写は、実に精彩に富んでいる。帝国時代末期の英国貴族だった三十六歳のサイクスは、ハンサムだが傲慢。自分の見解に合わない不都合な証拠は無視するの意見が変わると同じ証拠に飛びつき、結果として歴史上稀に見る悲劇を無頓着に引き起こしてしまう。

中村 サイクスもピコも、本当に悪いやつら(笑)。地図を見ると、国境が真っ直ぐ設定されている残酷さに驚きますね。アフリカの国境やベルリンの壁もそうですが、人間が生きている場所に直線を引く行為には、どうも違和感をぬぐえませんか。

山内 こうした直線は、いずれ破綻を迎えますね。いまやサイクス＝ピコ協定はシリアやイラクに完全に無視され、壮絶な争いが止む気配はない。では、どのような国境ならばよかったのか。著者は、フサインが掲げた東はチグリス・ユーフラテス

ついています。時代はロレンスの方へと逆回転しているのですね。

山内 混迷の元凶を知るにも、この本はさしあたりの役に立つ。

片山 あと本書の特徴は、ロレンスにばかり偏らず、ドイツ、オスマン帝国、アメリカ、石油開発など、周囲にも深入りして行くことです。大局の説明も丁寧で第一次世界大戦の全体像もつかめます。今を理解するために不可欠な歴史書と思います。

川から西はスエズ運河、北はトルコとの国境アナトリア、南はイエメンや紅海までという「大アラビア」には懐疑的です。多くの民族や宗教、宗派が存在するため、うまくいかないだろうと推測していますが、これは妥当な結論ですね。アラブというのは、それほど複雑な地域なのです。

時代はロレンスの方へ

中村 二人の弟を戦争で失ったロレンスが、母に送った手紙は印象的でした。息子を亡くして嘆き悲しむ母に、ロレンスは「こういう時に、あなたは勇氣ある顔をしていてください」と書き、自分の悲しさを押し隠して母親を鼓舞する。これが戦争のつらさです。日本でも、息子が戦死して木の箱に入って戻ってきたら涙など見せずに「お国のために役に立った」と言わなければいけないかっ

ハイマー病は、脳の老化と切り離せないため寿命が延びるにつれて患者数が増え、現代社会でも関心が高い病気のひとつと言えます。

山内 私も人ごとではなく、日々心配しています(笑)。

中村 世界中がアルツハイマー病克服を目指して研究を進めた結果、神経伝達物質のひとつであるアセチルコリンの減少が関係していると考えられた。ところがアセチルコリンの働きを強化して発症を遅らせる薬はあるものの、根治薬や予防薬はまだ開発できていません。マウスを使った臨床実験では効果が見られても、ヒトによる臨床試験では失敗続きでした。結核のように外部からの菌によつて起こる感染症と違って、アルツハイマー病や癌といった、ヒトの内蔵で引き起こされる病気の薬を作るのはたいへん難しいんですね。

著者の西道さんがすごいのは、臨

西道隆臣

アルツハイマー病は治せる、予防できる

長年にわたる研究で明らかになった画期的治療法とは？



集英社新書 760円+税

中村 長い間アルツハイマー病の解明に取り組んで来た研究者による新書で、積み上げてきた事実と研究にかける熱意、そして研究の現状とを正確に伝えています。脳のなかに

タンパク質の一種が溜まることにより記憶を司る海馬が冒されるアルツ

鼎談書評

床実験で使ったモデルマウスが的確ではなかったと仮説をたて、マウス作りから手がけたその情熱です。二〇〇二年に、よりアルツハイマー病患者の脳に近いモデルマウスの作製をはじめ、試行錯誤を繰り返して成功するのが二〇一四年。十二年という長い時間がかかっています。

片山 失敗すれば、時間も労力もすべてパーになってしまふ。研究者としては怖いですね。

中村 ええ、でもこういうところで信念を持って動くことが優れた研究には必須です。モデルマウスのおかげで、病を引き起こすタンパク質の分解を促す酵素を活性化させる根本治療法が見えてきました。これから創薬、臨床実験と実用化に向けて進んでいくわけですが、まだ道半ばとはいえ、今は西道さんもかなりの達成感を感じていると思います。

山内 年を取って記憶力の衰えを以前のように、時間をかけて幅広い分野について研究することは難しくなっています。西道さんもあとがきで研究を時間スケールによって「漁業」「農業」「林業」にたとえ、自分は漁業からはじめて林業へと進んできた、と上手に書かれていますね。すぐに成果の出る漁業ばかりに偏るのではなく、林業も大切にしたいと私も思っています。

山内 日本は何かひとつ成功体験ができる、追従しようと極端な政策を取りがちです。今はノーベル賞を取ったiPS細胞の研究に多額の予算がつきこまれていて、そうですが、その分、削減されている分野もある。三十年後ぐらいの科学の将来に危険をはらんでいます。

片山 大予算を短期的に付けて煽るよりも、安定して長期間研究できる環境が必要です。予算と雇用形態の両面で。しかし、いまは任期数年

自覚するようになると、「ひよっとして自分も『呆け』が始まっているのではないか」という不安が出てくる。この本はタイトルも秀逸で、思わず手に取りたくくなりますよ。

片山 専門用語を交えた研究過程の詳細な説明も、流れがあって読みやすい。内容が濃い新書ですね。

山内 老化と認知症の違いもきちんと書かれていますので、私の記憶力の衰えは老化の一種で、認知症ではないとわかって胸を撫で下ろしました(笑)。ものを書いたり考えたりと、仕事をしている方が脳は老化しないという通説は本当ですか。

中村 もちろんです。肝臓のように再生可能な臓器と違って、脳はほとんど再生しません。老化防止のためには神経細胞を活性化させる必要があります、それには頭を使ってシナプスを刺激するのが一番。どんどんお仕事をなさってください。

で、給料も安めの研究者を増やしている。成果が出ないと短期で斬り捨てる。そんな環境だから「小保方事件」も胚胎するのです(笑)。

山内 西道さんによれば、アルツハイマー病の根本治療法の確立は二〇二五年が目標だと言います。じっくりと研究に取り組んでいただき、

日本の科学が危ない

片山 先日ノーベル医学・生理学賞を受賞された大隅良典さんと同様に、西道さんも基礎研究の重要性を示唆しています。今の日本が抱える科学研究の問題に対して、警鐘を鳴らす本としても読める。

昔から基礎が大事だと言われているのに、時代の流れは完全に逆行していて、早く結果を出すことばかりが求められています。しかも日本のこの畑への研究費はアメリカの二十分の一と書かれていますね。太平洋戦争のときの彼我の差を頑張りでカバーしましょうというのと何も変わっていない。

中村 競争社会になり、研究にも「選択と集中」が持ち込まれるようになりました。今はまだ昔の蓄積で成果が出ているように感じますが、

大きな成果を出してもらいたいですね。幸いこの本には、アルツハイマー病のリスクを下げる実用的な方法もいくつか載っている。特效薬が完成するまでは、生活習慣病の予防につながるよう、適度な運動と適量のアルコールをたしなみ、脳を活性化しておきます(笑)。

津島佑子

狩りの時代

片山 今年二月に亡くなった津島佑子さんの遺作の長編小説です。

津島さんは太宰治の娘。身近な経験から思考をこつこつ積み上げ、私小説の次元を大きな世界観へと飛躍



文藝春秋
1600円+税

鼎談書評

させてゆく。それを思考の過程が滲み出るような執着力のある文体で綴る。戦後日本の大家のひとりでしょう。東日本大震災の原発事故に衝撃を受けられ、そこからは現代人が科学文明に背負わされているリスクへの恐怖心、そして国家への不信任感が作品を支配するようになりました。

本作にまず登場するのは、戦後まもなく若くして渡米し、そのまま彼の地で暮らす物理学者の永一郎。日本人が原子力に憧れてアメリカに行くのが福島にこだわる津島さんならのではの設定です。でもこの小説は永一郎だけの物語ではない。兄弟や甥、姪など一族のあれこれが、戦前から大河的群像劇として綴られ、時間は過去と現在を自由に往来します。

中心になるのは永一郎の姪の絵美子ですね。彼女は日本暮らし。父親は永一郎の弟。絵美子が幼いとき、情死でなく酔客に暴行されて亡くなったというのですが、やはり太宰治がモデルでしょう。絵美子の兄でダウン症の耕一郎は、早くに亡くなった津島さんのお兄さんの投影。作家の最後の作品に相応しいですね。

山内 私も最初は永一郎の話かと思測して読み始めたら、いい意味で裏切られておもしろかったですよ。

で、生前の津島さんとそんなことをお話してみたかったです。

美少年と黄色人種

片山 この、病気による差別に人種差別、あるいは日本人の西洋人に対する人種的劣等感を重ねるのが本作の力業です。象徴的に使われるのは、ヒトラー・ユーゲント(ナチス時代のドイツの青少年団体)の代表団の訪日という歴史的事実ですね。

山内 ヒトラー・ユーゲントは東京に来たときに一高にも立ち寄っています。二〇一一年には、当時の写真を展示した「ヒトラー・ユーゲントのバカヤロー!」という展示が東大駒場キャンパスで行なわれました。彼らが来たとき一高生はバカヤローと野次ついたらしい。なかなか肚のすわった「歓迎ぶり」だ(笑)。ヒトラー・ユーゲントへの歓待からは、

登場人物が多く、テーマも複雑。超長編になりそうなところを、読みやすい分量に抑えてまとめあげていく筆力は見事です。

主役ではありませんが、永一郎は随所で存在感を示しています。シカゴに住んでいてそうそう帰国はできないものの、大家族の長男でもあり、常に日本の係累を気にかけている。やりとりも、今のようメールではなく手紙ですよ。マメなのですね。

中村 いまやすっかり、大家族は減ってしまいました。本書では、永一郎がアメリカに出発する時は羽田に集まり、日本を訪れたら家に泊めてウナギを振る舞う。ときには親族の恋愛沙汰にも振り回される。こうした親戚付き合いは面倒なこともありますが、生きていく実感に結びつきます。今は面倒からは解放された一方で、蒸留水を飲んでいようという味気なくもありますね。

国益を無視して暴走した政治家や陸軍軍人たちの愚かが見えてきます。

片山 本書では絵美子の母方のおじおばたち、といっても当時は少女ですが、この子供たちが、ヒトラー・ユーゲントを一目見ようと山梨のとある駅へ向かう。ここからあととまるで沼正三の『家畜人ヤプー』です。ヒトラー・ユーゲントの美少年の前に黄色人種の劣等感が剣きだしになる恐るべき場面が用意されています。マゾヒズムの極致ですね。

中村 私もあの場面は衝撃的で、切なくなりました。

山内 土井晩翠と北原白秋がかかわっていたヒトラー・ユーゲント歓迎の歌が、随所で引用されていてます。実際に歌詞を見ると驚くね。

片山 ええ、戦後は完全に封印さ

片山 そして全編の主題は「差別」。絵美子は、ダウン症の兄が差別され続けて亡くなったという強烈な被害者意識を持っている。生きるには「不適格」で「慈悲死」させるべきと言った従兄さえ居る。

中村 「慈悲死」って、ショッキングな言葉ですよ。津島さんは、本当に嫌な言葉です。人間は無自覚に差別をしてしまう生き物であり、乗り越えることができないとお悩みになっていらっしやうたのです。その悲しさ、悔しさが伝わってきます。生物学に携わっていると、日々、生き物は多種多様だと実感します。理屈や精神論は抜きにして、生き物は多様でなければ生きていけないという事実が理解できます。ミミズやハエも、ありのままの姿で存在していることが大切なんです。生物について知れば知るほど差別という感情から解放されるの

れていましたから。「燦たりかがや、ハーケンクロイツ」とはすごい。今はインターネットで聞くこともできます。「感謝す朗らかにハーケンクロイツ」という歌詞もありますよ。

山内 いったい、何に感謝するとうんだい(笑)。

片山 三国防共協定でしようか(笑)。このアリア民族の美少年への憧れが日独伊三国同盟に発展し、大日本帝国を滅ぼす。戦後の日本は今度はアメリカに憧れ、原子力を使いこなしたいと願うけれども、その破局的結末が二〇一一年の出来事だった。これがダウン症のお兄さんを持つて差別や偏見に敏感となり、人の優越感や劣等感に深く思いを致すようになった津島文学のひとつの結論なのでしよう。背伸びして「西洋文明化」をはかってどうしても無理とする近代日本の宿命とも言える。重い宿題を貰うような小説です。

鼎談書評